

## 北海道大学構内における先史時代の森林と木材利用

渡邊陽子（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）

### はじめに

北海道大学構内は今から約 2500 年前の縄文時代の終わりから多くの遺跡が残されており、遺跡として登録されている（K39遺跡および K435 遺跡）。遺跡からは、土器や石器のみならず植物遺存体（花粉化石、種子、木材など）が出土し、これらの植物遺存体を分析することで過去の植生を推定することが可能となる。特に、木材（炭化材を含む）の樹種同定を行なうことで、当時の人々の木材利用を推定できる。本研究では、約 2000 年前の続縄文時代の遺跡（人文・社会科学総合教育研究棟地点）および 1000 年前の擦文時代の遺跡（弓道場地点および恵迪寮地点）から出土した炭化材および木材の樹種同定の結果と花粉分析の結果を基に、北海道大学構内の先史時代の森林と当時の人々の木材利用について考察した。

### 続縄文時代の森林と木材利用（人文・社会科学総合教育研究棟地点）

約 2000 年前の続縄文時代の竪穴住居址 11 基が出土し、うち 2 基から、竪穴住居の上屋構造材と考えられる炭化材が多数発見された。これらの炭化材の樹種同定を行なった結果、トネリコ属、ミズキ、ハンノキ属を中心とした落葉広葉樹 16 属・種および単子葉植物が同定された。花粉分析の結果から、この地点はハンノキ属やトネリコ属を中心とした森林であったことが推定されており、当時の人々は、遺跡周辺に広がっているこれらの森林から幹の通直な扱いやすい樹木を伐採して竪穴住居建築に使用したと考えられる。

### 擦文時代の森林と木材利用（弓道場地点および恵迪寮地点）

弓道場地点からは約 1000 年前の竪穴住居 1 基が出土し、その中から炭化材が発見された。これらの炭化材は、ヤナギ属、ハンノキ属、オニグルミであった。花粉分析の結果から 1000 年前はハンノキ属を中心とした湿地林であると推定されており、1000 年前の人々も遺跡周辺の森林から樹木を伐採して利用していたと考えられる。

恵迪寮地点では、埋没河川跡からテシ（魚を捕るための仕掛け）や大量の木製品が出土した。テシにはトネリコ属やヤナギ属、モミ属などが使用され、木製品ではアジサイ属、カエデ属、イチイが使用されていた。花粉分析の結果からは、この地点はハンノキ属、オニグルミ、ヤナギ・ハコヤナギ属を中心とした湿地林が広がっていたが、一方で農耕が行なわれていた可能性が示唆されており、農耕地周辺にはカバノキ属のような乾燥を好む樹種も生育していたことが推定されている。当時の人々は主に湿地林から木材を伐採して利用していたが、用途に合わせて樹種を選択していたのだろう。

### まとめ

北海道大学構内は 2000 年前からトネリコ属やハンノキ属、ヤナギ属を中心とした湿地林が広がっており、人々はそれらの湿地林から樹木を伐採し利用していた。また、用途にあわせて樹種選択を行なっており、人々は周囲の森林を上手に利用していたと考えられる。